

「憲法をいかし、戦争をしない国を  
未来の子ども達につなぐ!!」

戦後、80年。今、世界の各地で紛争や戦争が絶えず、収束の希望も打ち砕かれ大切な命が奪われている。刺さる子ども達の悲痛な叫び！始まったら止められないのが戦争。でも、戦争を止められるのは、今を生きる私たちです！

嘗て戦場となった沖縄から、人々の暮らしの中に身をおき発信する若者の声を届けます。

寄稿 「国を守る」ために蔑ろにされる

「島民の命と権利」

浅見流

今年の5月に東アジア平和行進に参加し、自衛隊基地が作られた島を巡り何人もの方からお話を聞いた。その現状と僕の思いをほんの少しですが、共有することで遠い島を想像してもらえたらと思う。

2015年の安保法制の成立以降、日本は集団的自衛権の解釈のもとで戦争する国へと変わった。それによつて最も影響を受けていた場所は、ここ南西諸島かもしれない。「台湾有事は日本有事」を合言葉に、それまで琉球弧では沖縄島にしかなかった自衛隊基地が、与那国島、宮古島、奄美大島、石垣島、馬毛島と次々作られていった。

その島々では今、中国を敵国とした戦場になる前提の訓練（日米合同訓練も）が頻繁に行われている。そして今、住民には避難計画が配られ、有事の際、九州などに避難するよう求められている。しかし、その避難計画も現実性に欠ける。

宮古島で暮らす人の話を聞く機会があった。

「沖縄の人、その中でも離島の人が犠牲になるのは、日本全体で考えたら仕方ないと思われることへの恐怖」「ウクライナ侵攻が始まった時、ニュースを見ながらこの島と重ねて毎日過ごしていた。ずっと苦しかった」「これからこの島で家を建てたり、伝統



弾薬庫から230mの家に住むSさん。防衛省は距離と集落の規模を元に弾薬は6トンまでという基準を「弾薬庫を3棟建設し、1棟あたり6トン」と無茶苦茶な解釈をした。毎日通い抗議を続ける。

行事を継承したり、先を見据えて何かをしようと考えても、いずれこの島が戦場になるかもと想像すると、何もできなくなる」「反対運動も10年ほど経ち無力感に襲われる」声を詰まらせながら、それでも話す声を聞くと、島の中でできる事には限界があると感じる。この人たちは暑い日でも心と体をすり減らしながら精一杯立ち続けている。これ以上頑張ってください、とは言えない。

沖縄を一方的に苦しめてきたヤマトの人間として沖縄は大変だな、とひとごとで良いのだろうか。僕も含め本土に暮らす一人一人が、自覚的になり行動することでしか変わらない。大軍拡に違和感をもたない人にこそ、この声を知ってほしいと願う。国家戦略という視点から、人の暮らしという視点で見たときに、それでもやむなしと思うだろうか。関東にも自衛隊、米軍はいる。戦場が沖縄で留まるという確証はない（沖縄で留まれば良いという話では無い）。国がすべきことは武力による抑止ではなく対話なのだと考える。

今僕は与那国島で生活をしている。台湾と110kmの距離のこの島は自衛隊員と家族で人口の2割になる。この島での人の営みを知り人と知り合うことで、この島のことをひとごとと捉えないように。沖縄を出たらこの島々の小さな声を伝えていきたい。（詳しくは浅見流のFB又はnoteで。）

浅見流（あさみりゅう）…2005年東村山市生まれ  
中学の授業で沖縄の歴史を学び関心を持つ。昨年初めて沖縄を訪れそのまま辺野古に滞在。今は沖縄を軸に発信している。

日本国憲法は、緊急事態という名の下に、権力が集中し、国民の権利が侵害される事態を避けるため、意図的に緊急事態条項を設けないという選択をしています。

常に、絶対に戦争を始めてはいけないことを肝に銘じ、憲法の三大原則（国民主権・基本的人権の尊重・平和主義（戦争放棄））を基本として、東村山・生活者ネットワークは、人権、平和を守る活動を愚直に継続していきます。